

東北・福島+埼玉=福の玉 が生まれ、ゆっくりふくらんでいきますように...

3月&4月
特別号

福王便り

2022年3月1日発行

ふ く た ま だ よ り

通巻 第95号

発行:『福王便り』編集委員会 NPO法人埼玉広域避難者支援センター・(一社)埼玉県労働者福祉協議会

協力:生活協同組合コープみらい埼玉県本部

連絡先:NPO法人埼玉広域避難者支援センター 〒330-0061 埼玉県さいたま市浦和区常盤6-4-21 ときわ会館1F TEL0120-60-7722



東日本大震災追悼式 2022年3月11日(金)

現在の時点2022年1月で、今年の3月11日は東日本大震災追悼式を営むことが出来るのかどうか、わからない状況にあります。しかし、皆様から開催に対する気持ちを強く感じているところであります。

そこで、当会で話し合いを重ねた結果、参列希望の方は人数を制限した予約制にすることにしました。参列希望の方は、下まで連絡を下さるようお願いいたします。



2021年3月11日 場所:龍山院

14:30:焼香 式辞 14:46:黙祷 撞鐘

協力 合同会社 映像工房たまき

埼玉県労働福祉協議会

主催 東日本大震災に咲く会 ひまわり

問合せ 橘(タチバナ)080-3091-6215



2020年3月11日の追悼式

■ 第27回チャリティ映画会

「くちびるに歌を」

日時: 2022年3月27日(日) ①10:30~②14:30~ (2回上映) 開場はそれぞれ30分前より行います。

会場: 埼玉会館 小ホール (JR浦和駅西口徒歩6分)

*会場ロビーでのバザー同時開催はコロナ感染状況により判断いたします。

午前の部は檀鼓太郎さんによる音声ガイドを実施

(希望者は上映中にFMラジオでガイドを聴きます)

午前も午後も上映後に県立伊奈学園総合高等学校

音楽部による合唱の演奏 演奏曲目: 主題歌「手紙~拝啓十五の君へ~」挿入歌「マイバラード」他

鑑賞希望の方は、相談センター 0120-60-7722 までご連絡ください。

主催: 埼玉いのちの電話後援会

後援: 埼玉県、さいたま市、埼玉県教育委員会、さいたま市教育委員会、埼玉県社会福祉協議会、さいたま市社会福祉協議会、埼玉県PTA連合会、さいたま市PTA連合会、さいたま市PTA協議会



※ご回答いただいた方々の性別・年齢・避難元の地域の分布は、以下の通りです。

〔性別〕	男性 47 人	〔避難元の地域〕	岩手県 1 人
	女性 69 人		宮城県 6 人
	未記入 16 人		福島県 116 人
〔年齢〕	30 代 1 人	○2011 年 4 月時点の区域	警戒区域 61 人
	40 代 17 人		計画的避難準備区域 9 人
	50 代 22 人		緊急時避難準備区域 22 人
	60 代 32 人		指定なし 9 人
	70 歳以上 55 人		わからない 7 人
	未記入 5 人		未記入 9 人
〔現在の居住地〕	埼玉県 117 人		
	東京都 3 人		
	栃木県 3 人		
	千葉県 2 人		

1. 住まいについて

『福玉便り』では2012～2017年にはアンケート、2018～2020年にはハガキの形で、毎年12月に読者の方々の声を集めてきました。この度、2021年12月に4年ぶり7回目のアンケートを、読者登録および一部市町村から発送されている方々約1250世帯にお送りし、132人の方からご回答をいただきました。ご協力いただいた皆様に、改めてお礼を申し上げます。ここでは自由記述を中心に、アンケートの結果をお伝えします。

まず、現在の住まいの住宅形態と、住民票の異動の有無について尋ねたところ、図1・2の回答となりました。4年前と比べて、借上げの民間賃貸住宅や公営住宅の入居者が大幅に減り、持ち家・分譲マンションにお住まいの方が大幅に増えていました。この4年間で、借上げ住宅の終了に伴って住宅を購入した方が一定数いることがわかります。他方で住民票につい

ては、むしろ異動していない人が若干増えていました。住民票を埼玉県に移したのち再び地元県に戻すことはあまり考えられないため、誤差によるものと想定できますが、少なくともこの4年間で住民票の異動に変化がなかったと言えるそうです。住宅形態が変化しても、住民票を引き続き地元県に置く方が多いという心情を伺えます。

また今回初めて、「全国避難者情報システム」の登録有無を尋ねました（図3）。7割の方は登録済ですが、残りの方は未登録もしくはわからないでした。94号で取り上げた通り、各地で県外避難者数の集計が問題となっており、「全国避

図1. 現在の住まいの住宅形態(2017年・2021年)

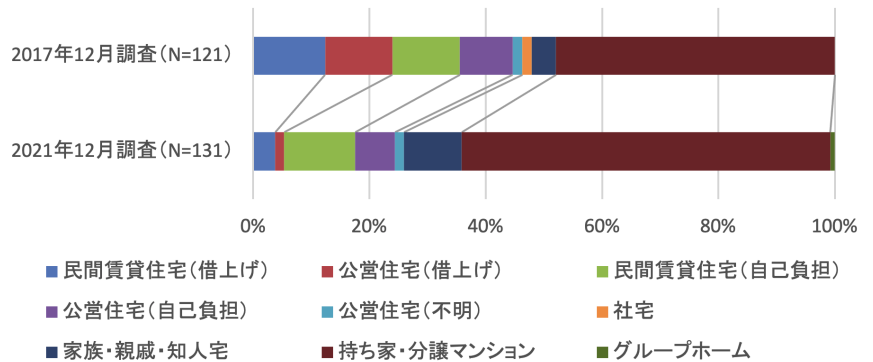


図2. 住民票の異動の有無

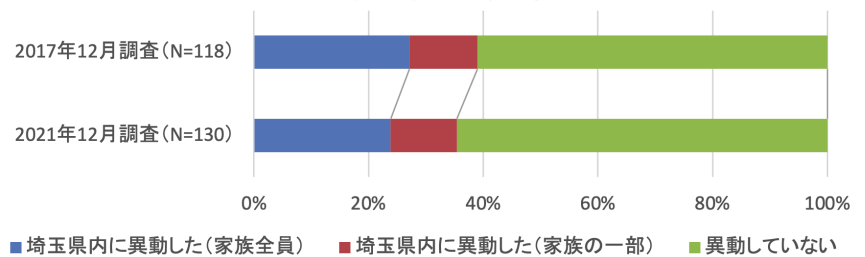


図3. 避難者情報システムへの登録(N=130)

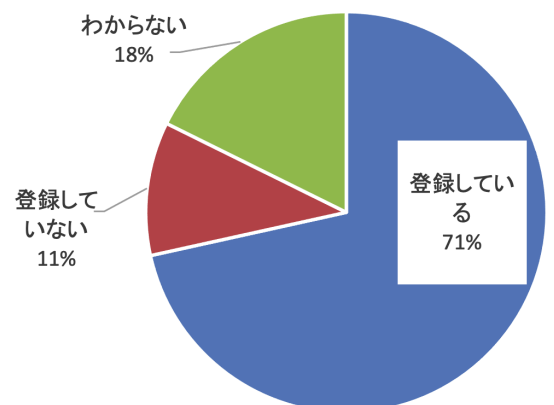
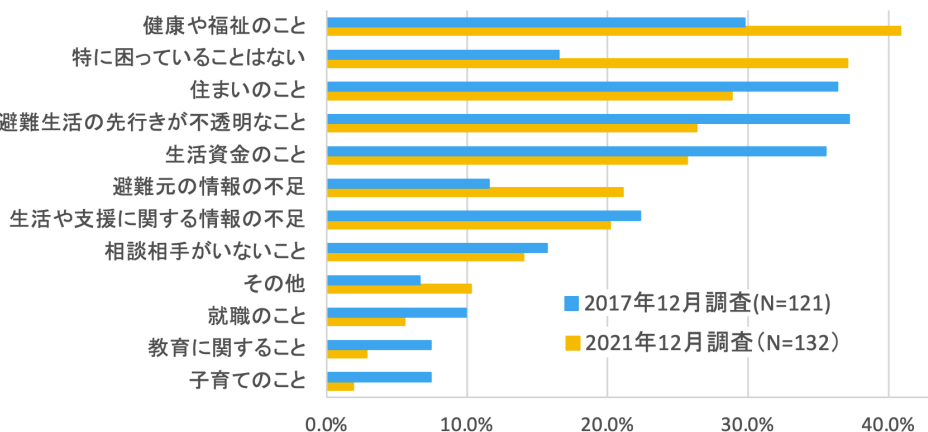


図4. 生活の困りごと(複数回答)



難者情報システム」は国や県の避難者支援政策の前提となるデータです。登録が不明な方は、お住まいの市町村の問い合わせ先(94号)か、福玉相談センターまでお問い合わせください。

2. 生活の困りごとについて

「生活の困りごと」についての回答を4年前と比較したものが、図4です。

「特に困っていることはない」が大幅に増加した一方で、「健康や福祉のこと」も増加していました。その他の項目は全般的に減少していますが、「住まいのこと」「生活資金のこと」「避難生活の先行きが不透明なこと」は継続して3割以上の回答がありました。また、「避難元の情報の不足」は増加していました。

この設問とあわせて、「○をつけた項目に関連して、具体的に困っていることや不安なことを自由にお書きください」という欄を設けたところ、様々な困りごとや不安が複雑に絡み合っていることが伝わってきました。

・現在地を終の住居で良いか？否か？で悩んでいる。夫婦共に福島生まれで福島育ちの田舎者！で都会に馴染めず、時々望郷の念に駆られて最近情緒不安定気味！(大熊町↓入間市、七十代男性)

・埼玉にきてから、難病にかかり、現在通院中です。その為今はパートで訪問介護の仕事をしています。同居家族は息子のみ。体力的に最近仕事がつく、かといってこのコロナ禍で

適当な仕事もなく、かといって息子の収入だけでは暮らしていけず。将来が不安でしかたがありません。(福島県↓坂戸市、五十代女性)

・福島より教育費(塾代、交通費)が高いので将来的に経済面が不安。新型コロナウィルスワクチンの予約の際、住民票がないのでネット予約ができず、受ける時期が遅くなった。(浪江町↓東松山市、四十代女性)

・母子家庭ということもあり、子の成長とともに教育にかかる費用やその他全

体的に支出が増えるため、賃貸の家賃を含めると収入と支出のバランスが悪くなり、今後不安がある。(伊達市↓さいたま市、三十代女性)

・今の地に住み続けたいと思いますが、帰る場所があるなら、家があるなら年老いてから大熊町で友人達と楽しくくらしたいと思う気持ちも心の中にあるのが真実。(福島県↓春日部市、六十代女性)

・私は浪江町請戸地区で津波にいました。自分たちは戻りたくても戻れませんが。田畑等少々あります。これをどの様にしたいのか分かりません。子供は戻らないと思います。この田畑は震災後そのままの状態です。残っている土地等を整理したいのです。(浪江町↓蓮田市、七十代)

・子供達の進学や就職などで帰るタイミングが合わなかった。その間夫の両親が体調を崩し介護のため夫のみ福島に戻った。子供の進学が落ち着いたら私も福島の自宅に帰ること

になると思うが次男が自閉症で埼玉で就職し「定年まで働きたい」と言っているが、次男を残し福島に帰ってもいいのか。もし私と一緒に福島に帰ってもちゃんと就職できるのか？と悩んでいる。障害の特質上環境の変化に弱いため。(南相馬市↓狭山市、四十代女性)

・何をどうしてよいのかわからない。トラウマ？予期不安。行動ができない。なかった事にされてしまつて現実だけが進み一体何からどうしたらよいのか不安を消すのに行動するが不安の増加が著しく耐えられない。(浪江町↓狭山市、四十代男性)

・コロナ禍で2年福島に帰省できていないので家の状態がわからないこと。このまま住民票は福島、住まいは埼玉の形を続けてよいのか。と悩みます。(福島県↓志木市、五十代女性)

・地域とのかかわりが無いのでさみしいです。さらけ出すのはイヤなのでなかなか深いつながりは難し

いと思います。(南相馬市↓越谷市、六十代女性)

・選択項目に対して漠然とした不安が止まらない。(南相馬市↓狭山市、五十代男性)

次に、期待する生活支援についての回答を、4年前と比較したものが図5です。この設問でも、「○をつけた項目に関連して、生活支援に関する具体的なご要望やご意見などを、自由にお書きください」という欄を設けたため、自由記述とあわせてみていきます。

まず、全般的に生活支援へのニーズの減少が続いており、以下の自由記述のように「特別の支援は必要ない」を選択した方が25%に増えています。

・震災後しばらくの間は生活困窮の時期もあったが、現在は無事再建を果たしている。ので支援は一切必要としない。「福玉だより」の送付も必要ありません。ありがとうございます。(福島県↓三芳町)

他方で今回増加していたニーズが、健康増進や介護に関するものです。また、住宅、避難元との交通、放射線に関する

図5. 期待する生活支援(複数回答)

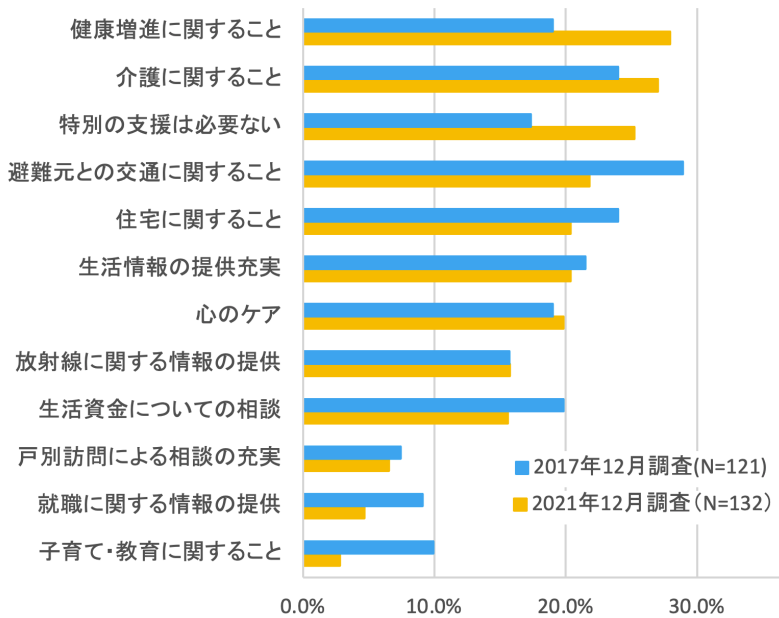
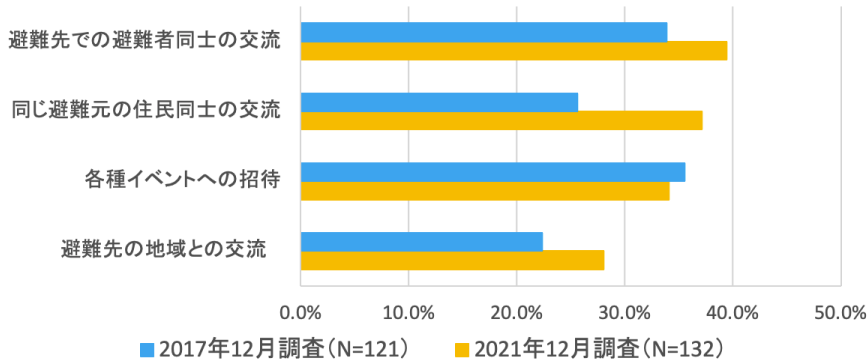


図6. 期待するイベント・交流会(複数回答)



る情報なども、一定のニーズがありました。

- ・簡単なストレッチ等のレクチャーがあればいいです。(六十代女性、福島県↓越谷市)
- ・現在、埼玉県営住宅に入居中ですが、原発事故被災者の家賃減免制度があれば情報提供願います。(富岡町↓杉戸町、七十代男性)
- ・福島にも家があり、墓もあると、年に数回は帰宅す

るので高速代の負担を継続して欲しい。(六十代女性、福島県↓越谷市)

- ・福島で生活している家族に会うため高速道路の無料措置を続けて欲しい。(四十代女性、南相馬市↓狭山市)
- ・双葉町、浪江町に視察に行き毎時3.8マイクローシールト以下の場所に街を作る様子ですが、埼玉から帰省する人には何にかの支援、アドバイスが必要で

ているカフェは継続してもらいたい。(五十代女性、浪江町↓板橋区)

- ・風化させないでもらいたい。原発事故はまだ終息していません。一例として、甲状腺ガンの増加は、憂慮すべきことですが、みんな他人事になっていきます。福島県からいじめられている現状があるので、埼玉県は、福島県に同調しないで、暖かく見守ってほしい。(五十代男性、郡山市↓さいたま市)

また、中学生以下のお子さんをもちの方を対象に、子育てに関する支援への期待をお尋ねしましたが、該当する方が減ったようで回答はあまりありませんでした。他方で、今回初めて「年齢を問わずお子さんのことで気になることやご要望などがあれば、自由にお書きください」という項目を設けたところ、様々な声をいただきました。

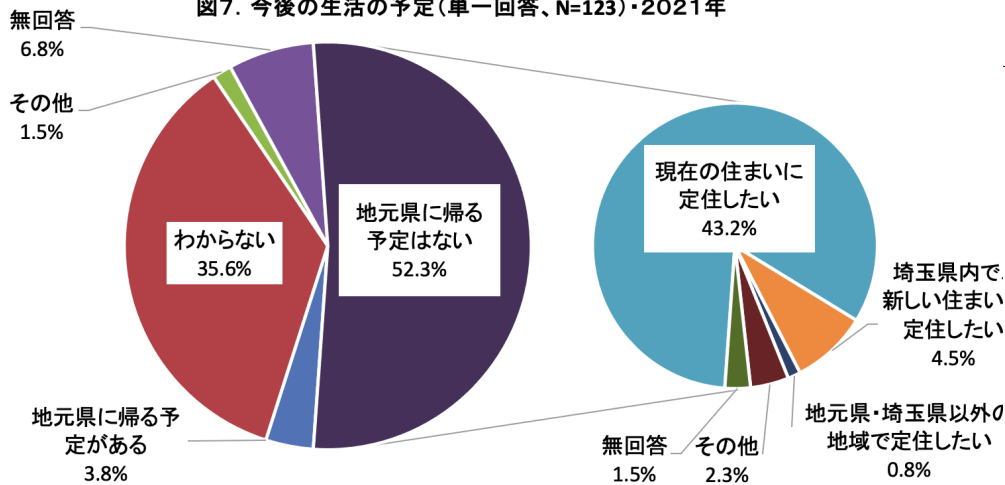
- ・高校入試に対する情報が欲しいです。住民票の移動は？授業料？勉強が苦手でも入れる高校は？奨学

金？塾はお金がかかりすぎて辛いところです。何かしらの優遇措置が有ればありがたいところです。(五十代男性、郡山市↓さいたま市)

- ・孫のことです。両親が医療に関わる職業です。コロナ自粛前は度々行って、バナーが保育園、学校行事の送迎、行事参加を手伝い家族が楽しみでした。ここ2年間は往来を自粛。先日孫は「洗濯入れてたんだ」「レンチンして1人で食べた」「クリスマス？欲しい物が分からないんだよ」。

3. イベント・交流会と子育て支援について

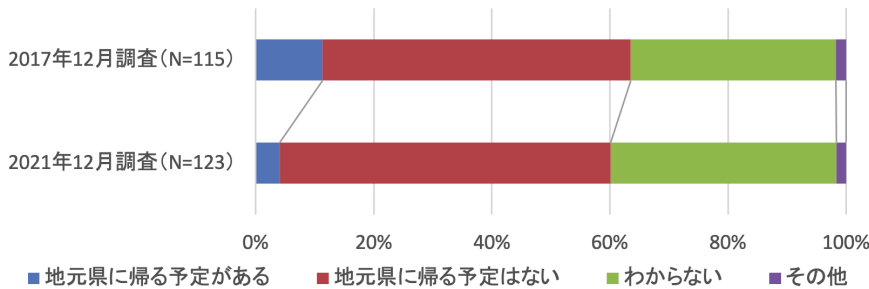
図7. 今後の生活の予定(単一回答、N=123)・2021年



時の思いを語れるような場があったら…と思う事があります。(四十代女性、いわき市→毛呂山町)

・20代30代等年代別、ジャンル別の個別的な支援体制が必要ではないか？また、主張や思いの発表会、音楽やダンス等パフォーマンスを表現するチャンネルも必要か？特に避難を

図8. 今後の生活の予定の比較(2017年・2021年)



10代、20代で体験した世代は今も強い影響を受けていると思う。当事者(児)のニーズをキャッチした対応に期待しています。(七十代男性、富岡町→杉戸町)

お子さんたちの成長に伴って、狭い意味での「子育て支援」へのニーズは減少してい

るものの、他方で進学情報等は引き続きニーズがあることが伺えます。また、コロナ禍での避難生活により、お子さんたちに負担がかかっている様子も伝わってきました。

さらに今回、震災当時に10代だった方々を気遣う声も複数ありました。今号の「ユースダイアログ」報告記事(8〜9ページ)にも書きましたが、震災・原発事故から10年を経て、そうした若者たちの声に耳を傾ける重要性を痛感しています。

4. 今後の生活の予定について

今後の生活の予定について尋ねたところ、図7のような回答が得られました。「地元県に帰る予定はない」が半数強で、そのほとんどの方が「現在の住まいに定住したい」を選んでいました。この結果だけ見ると、「定住」志向が強まっているような印象を受けま

す。

他方で、4年前の結果と比べると、「わからない」が若干増加していました。迷いつづけている方が多くいることが

伝わります。

福玉便りの読者アンケートではこれまで、「帰還か定住か」という二項対立に陥らないように注意してきました。他の設問への自由記述からも

読み出ているように、「地元県に帰る／帰らない／わからない」という回答の背後にある、それぞれの生活状況や心理状況を丁寧に拾っていくことを心掛けていきたいと思いま

5. 皆様のメッセージから

今回の読者アンケートでも最後に、皆さんからのご意見・ご要望や、最近感じていること、『福玉便り』へのメッセージを、自由に書いていただきました。幾つかの声をご紹介いたします。

① 10年という月日のもつ意味

今回の調査では、震災・原発事故から10年という月日が、皆さんにとって様々な意味をもつことが伝わってきました。

・10年間、年中・小6・中2だった子供達はそれぞ

れ無事に成長し、上の2人は震災をきっかけに看護師になり、最前線で働いています。一番上の子は結婚してもうすぐパパになります。あの震災は家族にとって大きな分岐点となる出来事でした。辛い思いもありましたが、それによって人生が違う方へ導かれていることを感じます。起こること全てに意味があるというのは、こういうことなんだ！と実感しています。(五十代女性、福島県→川越市)

・被災から10年が経って、体も老いを感じています。近くに娘家庭が住んで居ますので不安はありませんが、産まれ育った小高に前の様に車で運転して帰っていました。自宅は解体してしまい、前は無料で旅館に泊まりましたがそのサービスもなくなり、なかなか帰る事が出来なくなり残念です。3泊4日くらい宿泊サービスをしてほしいと思います。(七十代女性、南相馬市→戸田市)

・さいたま市営住宅に転居

して8年になります。最近は地域の方々とも交流ができ、落ち着いた生活が続けられていると、主人共々思っています。一緒に避難してきた母も来年百寿を迎えます。これまで皆様からたくさんの方の支援があった賜物と感謝いたしております。(七十年代女性、石巻市↓さいたま市)

②お別れのメッセージ

今回のアンケートで印象的だったのは、他県に転居するというご挨拶や、福玉便りの送付は不要というお知らせを複数いただいたことでした(反映が遅れて該当の方々に今号も届いてしまつたら申し訳ございません)。皆さんにとつての平穏な日々が少しでも早く戻ることを祈りつつ、果たして自分たちは必要な情報を届けられたのだろうか、と自問自答しました。

・がむしゃらに生きるしかなく今に至ります。3・11が近づくとも原発被災者への非難コメントやメディアが目立ち、はじめで悲しみで心えぐられま

す。帰れと言われてももう起きた事は元には戻りませんし帰れたところで全ては変わってしましました。福島県の別の場所でも身元を明かさず身をひそめて生きるしかないこの地上では特に日本では原発もとの被災者の生きる場所はどこにも無い様に思えます。これからそれは変わらないし毎年心えぐられて生きるしかないと思うしています。当時思春期だった家族が立ち直れず大変です。心だけでなく体も傷だらけです。何度もある事がない事がありました。お医者さんにも家族にももどかしい事に何も出来ません。その様な意味でも本当ににみじめですね。以前のコミュニティや友人関係もみな色々有りです。それぞれに事情が違うためもうつながってられない状態です。但し内情はその様でも被災者はその内はひっそり隠して生きています。きつとみた目や表面上では知られないように元気に見えている

と思います。仕方ないですね。福玉便り長い間ありがとうございました。今後の送付は必要ありません。感謝でした。(四十代女性、大熊町↓坂戸市) 春に両親の住んでいる実家に戻ることにしました。自主避難をしてから約10年、埼玉に住みましたが、大変なこともありましたが、社会の厳しさや都会ならではの面白さ、最先端の情報や物など学びも大きく、自分自身大変有意義な期間をいただきました。ありがとうございます。念願の福島暮らしもうすぐ始まりです。帰りたくても帰れない方が多くいらつしやると思ひますが、そういった方々の安心した暮らしを願いつつ、福島でがんばりたいと思います。皆様もどうかお身体ご自愛ください。(三十代女性、伊達市↓さいたま市)

・福玉便りいつもありがとうございます。こちらの方で静かに暮らしております。福玉便り送ってくださりありがとうございます。 ました。今後は送らなくてけっこうですので宜しくお願いします。(六十代男性、富岡町↓千葉市)

③『福玉便り』へのメッセージ

他方で、『福玉便り』への温かいメッセージや、楽しみにしてくれているというメッセージを書いてくださった方が大勢いました。

・お世話になっていきます。福島県との繋がりが、福玉便りです。ありがたいと思ひています。埼玉県に住んでいますが、心はつねに福島県浪江にあります。今年の三月で11年間住んで。あの日から11年間はあつという間でした。浪江町の地域の方々とは電話、ラインとかで情報交換をしています。その時が一番うれいす。その声が聞けるのです。でも孫達とはなれて生活してはいますが、それが少しさびしいです。でも自分達で選んだ道なのでがんばってこれから生活して行きたいと思っています。フアイト！で

す。なんでも前向きに考えて行きたいと思ひます。これからまだ寒いります。皆様ご自愛下さいね。ありがとうございます。(六十代女性、浪江町↓狭山市)

・避難者に対して、心を向けて頂き、とても心強く感じております。ただ、個人情報ということもあり、近隣に避難されている方(浪江町の方が)情報が以前より知られていないことが残念に思ひます。双葉町の方の集いは加須市で開催されていますが、知っている方がいない為、参加したことがありません。避難当時、つくば市内で開催された浪江町民の集いには、姉と二人で参加しましたが、近くで開催されなかったのかと思ひておりました。(六十代女性、浪江町↓加須市)

・放射能の恐怖から逃れた我々が今、コロナウイルスの恐怖に晒されている。目に見えない、匂いもない、味もない、という共通点はあるが、大き

な違いがひとつ、原発事故と違いコロナ禍は世界的規模で誰でも逃れることが出来ない点だ。いつ感染するかもわからない。自粛生活の続くなか、福玉便りの存在が支えとなりますようお願いします。

(五十代男性、浪江町↓上尾市)

・埼玉に来て、4年目を迎えて、子や孫とコロナ禍でも日々穏やかに生きていることに感謝する日々です。「福玉便り」については、毎回興味をもって拝読しています。震災体験を風化させないため後世の人々(子や孫たちの世代)自らの体験談の投稿の機会をいただければと思います。(震災時は福島県(飯館村)で小学校教員として勤務しておりました)私自ら震災の直接的被害者でありながら、その内容を忘れない気持ちと、避難は自分らの責任ではなく余儀なくされた怒り、絶望感の間での葛藤が「あの震災のことを忘れてはいけない。何らかの形で語り伝えなければならぬ」ということを、時にふれ思い起こす日々を送っています。このような活動をしていただいている団体及びNPOの方々に深い敬意を払うとともに、感謝しております。(六十代男性、富岡町↓上尾市)

・あれから11年、当事者たちも支援者たちも変化していると思う。私自身は「記憶」の賞味(?)期限は有限なので、早くから「記録」化の活動をしてきました。何事もタイミングが大切です。私たちが「今」やるべきこと、できることを確実に実践すること。それぞれ個人の使命はちがいます。私は、私自身の使命さがしとその実現のため、完全燃焼しています。(七十代男性、富岡町↓杉戸町)

・こうして避難している人に気に掛けてくれてる事が嬉しいです。感謝しています。福玉便りが届くたびに、忘れないでいてくれる人達がいると思います。ありがとうございます。その反面、もうあの時に感じた苦勞を思い出したくなく、忘れない自分もいます。忘れられたくないけど、自分の記憶は忘れない、あの時の苦しみはなくなつてほしいですが、事あるごとに思い出されます。そんな矛盾を繰り返して苦しい時もあります。過去は変えられないから、未来を見て生きていきたいのに、原発事故のわだかまりは、ことある事に足かせになり、前に進む力減弱させます。この思いを解消するには、どうしたらよいのかと思う毎日です。人の手におえないものを作った人類全体の罪なんでしょうね。それを感じずに生きていた頃に戻りたいと思ってしまう。忘れられていない、と福玉たよりが届くたび、ありがたく思っています。心からありがとうございます。(四十代男性、浪江町↓狭山市)

『福玉便り』ではこれまでアンケートやハガキを通して皆さんの声を紹介する際に、

「●●は○○%」という数値が一人歩きすることを注意しつつ、多様な立場の方が多様な支援を必要としているという現状を踏まえて、「こぼれ落ちた声」を拾うように丁寧な声で拾っていくのか」という点が重要だと指摘してきました。今回のアンケートはそのことを改めて認識させられるとともに、時間の経過とコロナ禍によって問題が複雑化していることや、以前よりも「不安」を感じている方が増えている印象を受けました。大事なのは一人ひとりの声であり、引き続き現状をできるだけ丁寧な把握できるよう努めてまいります。

今回のアンケートを分析しながら、「本当に必要な支援とは何なのか」ということを改めて考えさせられました。読者の皆さんからのさまざまな「声」を、引き続きお待ちしております。

※福玉便りの発送が不要の方は、お手数ですが福玉相談センターまで電話かメールでご連絡ください。

福玉相談センター：電話 0120-60-7722 (フリーダイヤル)

メール：fukushima_soudan@yahoo.co.jp 相談日：月～金 (9:00～17:00)



当面の間、福玉相談センターの開所日を、月曜日、水曜日、木曜日、金曜日の10:00～16:00とさせていただきます。なお、メールでの相談は随時行っております。こちらから折り返し、ご連絡しますので、差し支えなければ、連絡先をメールの文面に記入していただくようお願いいたします。ご迷惑をおかけしますが、ご理解のほど、よろしくお願いいたします

3・11 ユースダイヤログ

昨年12月10日、編集部の原田が担当する立教大学の「福祉社会論」の授業の一環として、東日本大震災支援全国ネットワーク（JCN）による「三・一ユースダイヤログ」が開催されました。この企画は、震災当時に小中高生だった被災地の若者が何を感じてきたのか、震災を経験しなかった若者に繋ぐという趣旨で開催されるものです。この日の企画では、福島県伊達市出身のわかなさん、宮城県山元町出身のゆきこさんにご登壇いただき、同年代の学生たちがお二人の話に耳を傾けました。内容を簡単にご紹介します。

わかなさんは震災当時15歳。中学校の卒業式から帰宅して、この世の終わりだと思いうぐらいの揺れを経験しました。原発が爆発したと聞いて、「一日でも早く逃げないと駄目だ」というお母さんと、「国が大丈夫だって言うてるんだから、ここに残っていても大丈夫だろう」というお父さんで、意見が分かれましました。3月15日に山形のお母さんの実家に自主避難したのち、高校の入学で4月に福島に戻りました。しかし戻った後も、福島に残っていいのか、それ

とも逃げたほうがいいのか、毎日日家族会議をしていました。最後の家族会議でお母さんから、「あなたはもうどうしたいの？」と聞かれました。わかなさんは「私はせつかく高校合格したし、行きたいよ。でも自分の高校3年間と自分の人生を天秤に掛けたら、どちらが大事かは明白でしょ」と答えると、ご両親は押し黙って家族会議が終わり、次の日から自主避難の準備が始まりました。福島の高校に1カ月間だけ通い、もう一回試験を受け直して、山形県で高校生活を送りました。山形の短大に1年通った後に、単身で北海道に移住して、今に至ります。

当時のわかなさんにとって、大人は何でも答えを知っている、常に正しい助言をくれる存在だと思っていたので、大人もわからないこともあるんだと気が付いたことが、ものすごくショックでした。また、福島の高校から転校するときに、ある先生から「この本に安全安心だと書いてある。だからここに残留」と言われたり、別の先生から「お前が行くと風評被害が広がるから、行くな」と言われたりしました。原発事故というの

は、嘘と本当がごちゃ混ぜになった世界に投げ込まれたように、子どもながら感じました。他方で山形の高校では、隣の県なのに異国の話みたいな感覚で、原発事故のことをなかなか話せる状況ではありませんでした。そんなものが積み重なって、高校生活では人間不信に陥ってしまったといえます。

ゆきこさんは震災当時小学3年生で、帰りの会の最中に地震が発生し、体育館に避難しました。津波が来て多くの方が亡くなったと聞いても状況を理解できませんでした。自宅は無事だったものの、ライフラインが寸断されて、2か月くらい電気水道が使えない生活になりました。倒れた家具を直して汗はかくのに、入浴や洗濯ができず、身体中にあせもができて辛かったといえます。利用していたお店がなくなり、通っていた道路にヘドロが溜っていて、途方もない復興の日々が始まったことを感じました。家の大人が全員仕事に出ていたので、ゆきこさんが3歳の妹さんの世話をしたり、妹さんをおぶって家族の水くみや食べ物の配給をもらってきたりしていました。学校では、体育館に避難しながら教室に通っている子たちもいましたが、みんなが震災

の話をしていないように努めていました。

津波を受けた／受けない、家をなくした／なくしていないに関係なく、みんなが同じだけ傷付いたし苦労を強いられていたと、今感じています。でも炊き出しに行った時に見ず知らずの方から「お家、どうだったの？」と聞かれて、「津波は来なかったんですけど、住める状態じゃないんです」と答えたなら、「でも津波来なかったんだもん、良かったよね」と言われました。当時は支援の格差に文句を言うて対応してくれる人もいないし、9歳の子どもが言ったって誰が拾い上げてくれるんだという諦めもあって、無意識のうちに我慢が当たり前になっていました。

最近いろいろな災害があるたびに、例えば台風だと床上浸水した人とそうでない人というような、その区分が明確であれば明確であるほど、被災者間に分断を生むんだろうな、と感じます。本来助け合って頑張ろうという人たちが分断してしまうのは本当に悲しい話だし、被災者の意識を分裂する方向に持っていくような支援が大それたと感じています。

以上のお2人のお話に対して、学生から「大人になられた

2人だからこそ、あの時の自分にこうしてあげたいということとはありますか？」という質問がありました。わかなさんからは、「当時の私の周りにはちゃんと話を聞いてくれる大人がいなくて、ものすごくストレスを感じていたので、ちゃんと話を聞いてあげたいなって思っています」ゆきこさんからは「もちろん妹の世話を手伝ってくれる人とかは欲しかったんですけど、やっぱり一番欲しかったのは、ちゃんと話を聞いてくれて、加えて気を使わなくていいという意味で、外部の人がもつと子どもの支援に入ってくれたらうれしかった」というお返事をいただきました。

最後にわかなさんから学生に、「高校生の時にものすごく死にたいって思ったことがあったけど、本当はものすごく生きたいんじゃないかって、その時思ってたんです。私は、大人たちが言い合う中で子どもたちが板挟みに遭う状況を身近で感じてきて、社会の中でもそういうあつれきを感じ続ける10年間を過ごしてきましたが、これは原発事故だけでなく、皆さんも別な形で経験することはあるんじゃないかと思うんです。それでも生きていいし、生きる資格が誰しもあります。生

きることを諦めないでください」というメッセージをいただきました。ゆきこさんからも、「最近災害が頻発して、行政は何か支援をするときに、明確な

年間我慢したことを、ここで本音として話せたのがすごく貴重な機会になりました」というメッセージをいただきました。

区分を作らないといけないのは理解できますが、もし皆さんがボランティアに行くことがあったら、柔軟な対応、民間からこぞできる支援を大事にして、被災した人が少しでも本音を言える環境を作っていただけたらと思います。私自身10

お2人のお話を伺って、私もいろいろなことを考えさせられました。一方では「被災者」「避難者」という大きな括りがあり、他方では「残った方」「避難した方」「津波で家を失った方」「そうでない方」のような区別をしてしまいがちですが、一人ひとり

が違う経験をして、全員がそれぞれ辛い思いをされてきました。でもそこに分断が生まれ、「避難するな」「あなたは良かったよね」といった言葉が生まれてしまう。震災・原発事故の直接的な被害だけでなく、社会関係によって傷つく方がいるということ、これは様々な社会問題にも共通する点であり、支援者はその構造を意識しないと

いけないと感じました。また、今回のお2人とも、子ども

もでありながら多くの判断や責任を担わなければならず、しかもその気持ちを誰にも打ち明けられない立場にありました。もちろんお2人の親御さんたちも被災者で辛い経験をされており、大人もまた弱い存在ではあるのですが、結果的に最も弱い存在である子どもたち

に最も重圧がかかってしまっていました。これは私たち大人の責任であり、子どもたちの声に耳を傾ける重要性を改めて

感じました。『福玉便り』でもこうした企画を検討したいと思っています。

授業後には学生たちから、長文の感想文が数多く寄せられました。とりわけ、震災のことは詳しく知らなかったが自分も辛い経験をしたことがあるという学生たちから、様々な共感の声がかかれていました。お2人のお話を、学生たちが今後の人生に活かしてくれることを願います。(編集部・原田)

原発事故と甲状腺がんの因果関係を明確にし、他の患者の救いのきっかけに

2022年1月27日、事故当時6〜16歳で福島県内に住んでいた甲状腺がんに罹患した6人の若者が東京電力提訴しました。甲状腺がんになったのは、福島原発事故による放射線被ばくの影響だとして、因果関係を問う裁判になります。

現在、福島県の甲状腺検査で「悪性ないし悪性疑い」と判定された人は266人、うち手術を受けた222人中221人が甲状腺がんと診断確定したと報告されています。この他にも、県が把握・公表していない小児甲

状腺がん患者が存在していることもわかっています。

国も福島県も、頑なに「スクリーニング効果(発見されなくてよい小さながんを見つけた)」や「過剰診断(不要な手術をしている)」を挙げ、原発事故と甲状腺がんの因果関係を否定していますが、手術の執刀医である福島県立

医大の鈴木眞一氏は、「これまで行なった手術は適切で過剰診断ではない」と別の裁判で証言しています。

提訴後の記者会見で、原告

の一人の女性は、声をつまらせながら、「甲状腺がんと

診断されたあと、医者に原発事故との因果関係ないと言われました。その時の何とも言えない気持ちと、母の涙は今でも忘れられません」と語りました。

また、高校生のときに診断され手術を受けた女性は、その後、再発し、遠隔転移しました。完治は難しく、「将来が不安で、先のことが考えられませんが、私たち以外にも甲状腺がんの子どもの

皆さんはいる。少しでも他の皆さんの力になればと多いです」と語っています。

また、中学2年生で原発事故を経験した男性は、現在の社会人3年目の25歳。20歳の時に甲状腺がんの手術を

うけ、合計4回の手術を経験しました。昨年末には放射線治療を開始し、現在、経過観察中です。「原発事故と甲状腺がんの因果関係を明確にし、安心して暮らせる補償を充実させ、他の人(甲状腺がん患者)の救いのきっかけになってほしい」と語っています。

「ずっと、誰にも言えなかったという患者もいます。自分がかんに罹患したことが、周囲に『風評被害を生む存在』と思われる懸念からです。被害を受けても、つらさを語れない空気を作り出したのは、いったい誰なのでしょう。」

原告の6人と、そして発表されている300人近い甲

状腺がんとは診断された福島県の子どもたちは、心身ともに、公的に守られてほしいと思います。何より、子どもたちが「安心して語れる」場も必要です。罹患自体も当然つらいのに、さらに、甲状腺がんを隠さなければならぬ状況が、変わってほしいと心から思います。

現在、訴訟の支援団体である「311甲状腺がん子どもネットワーク」が、訴訟の寄付を募っています。寄付に添えられる応援メッセージに、原告の子どもたちも励まされているそうです。

今後、この裁判の行方を見守りたいと思います。

(編集部・吉田)

各地からのお便り

『福玉便り』では2012年3月の創刊以来、埼玉県内各地の交流会情報をカレンダー・マップで紹介してきました。今回、東日本大震災・福島原発事故から11年を迎えるにあたって、各団体の皆さんからメッセージや写真をお寄せいただきました。コロナ禍により交流会開催が難しい日々が続いていますが、再開の日に向けて、誌面上で交流を継続できればと思います。読者の皆様もぜひメッセージをお寄せください。

① 双葉町民によるボランティアカフェ (加須市)

あれから11年。あつという間だった様な……とつてもながい時間だった様な……不思議な感じです。旧騎西高校避難所でのことは、今でも時々思い出すことが多いです。様々な辛いことがあり、今もなお、たくさんの人に手助けを頂き、支えられてきたことにありがたき思いいます。辛いことや衝撃動揺は、時とともに薄れることは自身にとつては良いことですが、社会においては様々なことが置き去りになったまま、薄れていくのは悲しく思います。ボランティアカフェも新型コロナの影響で休止になり、再開のタイミングを見ながら新たな波に何度か押し流されていぶ経つてしまいました。このところ、「みんなに会いたい！お喋りしたい！再開はまだですか？」の声を伺うことが多くなりました。来年度は、是非とも再開したい！と思っています。また皆さんと会える日を楽しみにしています。(鶴沼より) 090-8879-0213(SNN)

③ 双葉町老人クラブ女性会&さいがい・つながりカフェ (加須市)

感染拡大の月は休会になりましたが、その分、開催できる月はいっそう真剣に作品作りに集中。完成すれば、にぎやかです。色々挑戦していますが、こういうのも作りましたよ。

090-5532-7380 (薄井さん)



⑤ すくすくのあそび広場 (加須市)

⑥ オバトン (加須市)

11年目にはなりますが、オバトンとしての活動は今後も変わりなく継続していきます。またコロナが終息した時、他団体との交流やフリーマーケットなど再開をしたいと考えています。これまで通り調理室、研修室での大人の塗り絵教室を行っています。また、ハーモニカ、合唱、そして充分なおしゃべりができるように前回より多目的ホールを使用しています。コロナ禍の中で明るいニュースをひと言。塗り絵教室に参加された双葉町の方が大人の塗り絵展覧会に出品し、入選しました。いつでも、みなさんの参加お待ちしております。



ます。(写真は塗り絵教室に初めて複数の男性が参加された時のものです)

090-6526-8560 (藤井さん)

⑧ 東日本大震災に咲く会ひまわり (上尾市)

今年の3月11日は昨年の今頃より、コロナの感染状況が続けません。収まるような気もしますが、長引く可能性もありそうです。そこで、各方面の方々と相談を重ねた結果、追悼式としての開催は難しいので、黙祷の会として開催。参列を希望する方は登録制にすることにしました。上限は3月1日に判断するつもりです。登録制にすれば、仮に前日に中止にせざるを得ない状況になっても、こちらから連絡ができるからです。絞り込んだ開催で、何とかコロナを切り抜ける会にしなければとの思いです。

080-3091-6215 (橘さん)

⑩ くまがや結の会 (熊谷市)

東日本大震災から11年の3月が来ました。一昨年に続きいまだ世界中に新型コロナウイルスが猛威を奮っています。この疫病蔓延で月日とともに震災や原発事故は風化の一途を辿っているように感じます。震災、原発事故、新型感染症等の無い平穏な暮しがいかに「最大の幸せ」かと、つくづく思い知らされます。「くまがや結の会」は昨年11月、久しぶりにランチ会を開催しましたが、再び中止の現状です。1日でも早く以前のような会合ができますことを望んでいます。

090-7661-9236 (林崎さん)

⑫ お茶ついでるさと会 (久喜市)

090-6855-7140 (木幡さん)

⑯ あゆみの会 (越谷市)

あゆみの会では昨年12月19日、大根収穫祭を開催しました。地域の人含めて48名の参加者があり、天気も良く最高の日でした。今年も感染対策しながら交流を続けていきたいと思っています。

090-9425-2001 (石上さん)



⑬ いきがいサロン (杉戸町)

(すぎと) SOHO クラブ小林さん
0480-31-0055

⑭春日部つながりカフェ(春日部市)

始まったばかりの頃、「今日はだれか来るかな」と思いながら実施していたこの交流会も、今では多くの方にご参加いただけるようになりました。カフェでは、毎回、司法書士が参加し、土地家屋の名義変更や相続手続など、暮らしの中で起こるさまざまな悩みをどのように解決していくかについての話題を提供させていただき、参加者と一緒に考え、共有しています。これからも、ふるさと想いながら、つながり続けて行きましょう！

090-8879-0213(SSN)

⑮ひだまり広場(越谷市)080-5006-3310

(河原崎さん)

⑰ひまわりの会(川口市)

080-5431-0123 (島田さん)

⑲さいがい・つながりカフェ(さいたま市)

⑳新座つながりカフェ(新座市)

090-2402-9155 (谷森さん)

㉔青空あおぞら(所沢市)

毎月第4日曜日に新所沢公民館で実施しています。毎回、司法書士や社会福祉士などの専門家と一緒に輪の中に入って、その時々話題についてお茶を飲みながら楽しく話し合ったり情報を共有しています。福島県内に帰還した方、遠く離れた場所に移住した方、お仕事や子育てなどで忙しくなかなか参加できない方が久しぶりに参加しても、いつもと変わらず和気あいあいと、ホッとできる場として、コロナ対策を万全にしたうえで、今後も継

続的に開催していきたいと思っています。澄み渡った青空のような気分、皆様と楽しい時を過ごせるの楽しみにしています。

090-8879-0213(SSN)

㉔おあがんしよ交流会(ふじみ野市)

11年前、園児や小学生だった子供たちは、大学生・高校生になり身長も見上げるようです。何となく面影を残した卒業の写真に目を細めました。続いていくコロナ禍での交流会開催は難しく、昨年は2回だけの顔合わせでした。感染が下火になった11月、皆さんの「会いたかった!」の気持ち



は会場に溢れ、お会い出来なかった期間のエピソード等を楽しく語り合いました。12月は毎年挑戦したオレゴンモミのクリスマスアレンジ作りをしました。まん延防止が解除されましたら、また再会しましょう。

090-5345-8408 (松舘さん)

㉔ニコカフェ@川越(川越市)

何年経っても経済的にも精神的にも苦しい方は多く、更に追い打ちをかけるように制限された暮らしを強いられて不安が増大しております。特に学級閉鎖や部活動の中止でお子さんの心のバランスが崩れています。給食がないので親の負担も大きいです。当事者である私たちが求めるものは「会話」ですので、訪問したり、交流会を時間差で開催したり、工夫をしながら行っております。「ほっとけない」をモットーに細かな声がけを心がけています。一日も早くマスクの無い生活がしたいですね。福島に帰りたいし、みんなでハワイアンズもいきたいなあ。

070-5080-4494 (鈴木さん)

㉔玉兎の会(さいたま市)

昨年から引き続き、東京にいる先生とオンライン (Zoom) で繋ぎ、With You さいたまで能楽ワークショップを開催しています。Zoom の環境がご自宅にあれば、ワークショップへ参加できますので、お気軽にお問い合わせください。後で、Youtube でもご覧になります。昨年は一度だけ、集合型のワークショップができました。今年は



数多く、集合型のワークショップを開催したいと思っています。玉兎の会はこれからも変わらず、埼玉の皆さんと一緒に被災者の皆さんに寄り添って活動を続けていきます。(写真は、昨

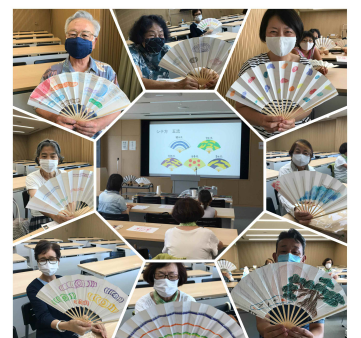
年の8月

に開催した「白扇子ワークショップ」のものです。3月はお休みの予定で、4月はWith You

さいたまにて、集合型もしくは先生と繋いでオンライン (Zoom) での開催予定です。ホームページ、SNS 等でお知らせいたしますので、ご確認ください。

048-854-8703 (小林さん)

<https://gyokutonokai.wixsite.com/2018>



㉔つながり(毛呂山町)

090-9032-8116 (河井さん)

福島原発事故責任追及訴訟 判決公開

福島原発さいたま訴訟は、ようやく判決期日が指定されました。7年半に及んだ審理に判決が言い渡されます。裁判所が原告らの訴えに真摯に応える、正義の判決が出されることを期待します。多くの皆様と一緒にこの判決を見届けたいと思います。ぜひ、傍聴においでください!

4/20(水)11:00開廷

開廷時間の30分前に傍聴整理券配布が締め切られます。それより前にさいたま地裁B棟前にお集まりください。

<http://fukusaishien.com/>

048-960-0591(みさと法律事務所)

今号の発行は、生活クラブ生活協同組合埼玉の皆様のご支援をいただきました。ありがとうございました。

生活クラブの取り組み ～暮らしの安全を求めて～



生活クラブでは東日本大震災の翌年2012年から福島の子供たちに放射能を気にすることなく外で思いっきり遊んでもらおうとリフレッシュツアーを始め、甲状腺検査活動や、復興支援カンパを行っています。

2019年にはぼろろんの方たちに福島の郷土料理を教えていただきながら交流を深め、7月のリフレッシュツアーでは一緒に造幣局や夜の交流

会に別所沼公園のナイトツアー、翌日はデイキャンプ、最終日には鉄道博物館で楽しい時間をすごしました。残念ながらコロナ禍で今は開催出来ず交流できていない状況で

す。

そのような中オンラインでの東日本大震災復興支援学習会では双葉郡川内村の、飯館電力のバーチャル視察では飯館のそれぞれの状況をお聞きしました。地震は天災だけ

あんな事故があったにもかかわらず地震が起こる度に緊急地震速報のなかで繰り返される「原子力発電所に異常は認められませんが」という放送に毎回不安な気持ちに駆ら

れ違和感を覚えます。汚染されたままの山、取り除けないトリチウム汚染水。まだ終わっていない原発事故。色々な活動がコロナ禍で中止、縮小されるなかでも、あの未曾有の災害を忘れてはいけないと私たち生活クラブ埼玉では機関誌スピカ3・4月号「3・11を忘れない」特集号を作成しました。

一日も早くコロナが終息する事を願います。その時にはまたリフレッシュツアーを再開し福島の方やぼろろんの方たちと交流したいと思っています。

生活クラブ埼玉サステイナブル政策委員会

福玉支援センターからのお知らせ

福玉便りにも記事を執筆していた福玉支援センターの理事の一人が、別の支援団体において、性被害に関わる問題を引き起こしていたことが判明しました。当人は福玉支援センターの理事を辞任しました。

会員の皆様、関係者の皆様、特に避難されている方にご心配とご迷惑をおかけしたことをお詫びいたします。避難されている方の中には、信頼を裏切られたことで、傷ついてしまう方がいるのではないかと深く憂慮し、当団体としても深くお詫びする次第です。

今回の件を踏まえ、避難者支援団体として、支援のあり方、とりわけ支援活動の中での性被害の実態および防止について、あらめて学びなおし再発防止につとめます。

詳細は福玉支援センターのホームページ <http://fukutama.org/> をご覧ください。

2022年2月16日

NPO 法人埼玉広域避難者支援センター